



## 第62次県教研 子どもの育ちを考えるシンポジウム 「生命と心の教育について」

～発達障害を中心に子ども理解をいかにすすめるか～

基調講演 (武庫川女子大学 教授)  
**石川道子**さん

大人になってもできないことは多く、その都度、支援が必要になる。生涯にわたって支援をする覚悟を周囲が持たなければならぬ。

知っていること  
役立つこと

問題行動の中にパニックがある。できないことでパニックをおこす。間違っただけで覚えた行動パターンを身に付けていることが多く、これが問題行動とされる。

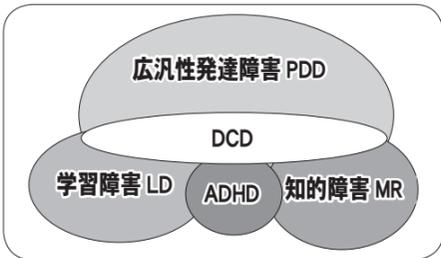
できないことの中には、乳児期の発達課題が影響を与えているものもある。例えば、一定の姿勢をとり続けることやきれいに食事を食べるなど、物をしっかりと握ることなど。語弊を招くかもしれないが、発達障害の子どもたちにとって、学校生活というものは非常に不利な条件が揃っている場所であり、できて当たり前という誤解を無くさなければならぬ。

### 発達障害支援の常識

私たちは脳で情報を処理している。発達障害の場合、この情報処理の仕方に特性がある。この特性を理解することで、教え方は変わってくる。問題行動は、学び損ないや間違っただけで覚えたことが要因であり、いわば二次障害の部分だ。子どもの特性に合った教え方を工夫して欲しい。

- ・ ADHD 注意欠陥多動性障害
- ・ LD 学習障害
- ・ PDD 広汎性発達障害 (= ASD 自閉症スペクトラム)
- ・ MR 軽度の知的障害、知的境界域
- ・ DCD 発達性協調運動障害

### 発達障害に含まれる障害



### 発達障害の関係図

ADHDは不注意・衝動性・多動の行動の特徴で判断される。この特徴が一部のこともある。さらに、MRやLD、ADHDの行動の特徴の背景に、PDDの子どもたちがいる。ADHDは乳児期にその特徴が目立つが、大きくなってこの特徴が少なくなると、対人関係の問題が前面に出てくる。



石川道子さん

広汎性発達障害を、最近では自閉症スペクトラムとしている。ここにアスペルガーなどの高機能自閉症や自閉傾向などが含まれる。見逃されがちなものが、DCDであり、体育のような大きな体の動きや手先の細かい運動など、年齢相当にうまくできず、何かを実行する際に体が動かない事は大きな問題になってくることが多い。

で、特にASDの子どもたちに多い。また、これらの障害の特徴が複合的にある子どもも多く、それぞれの細かい診断名ではなく、発達障害がある、ないという大きな捉え方で総合的に考え、「発達障害」という診断名の言い方をしている。

### 人に影響を与える要因

幼少期は、生まれ持った特性が行動への要因となる割合が大きい。大人の場合、習い覚えたもののほうが割合は大きくなる。発達障害という生まれ持った特性に、学校での経験や学習環境など、習い覚えたもので行動が決まってくる。自分にとって過剰しやすい環境かそうでないかによって行動は大きくかわる。学習で習得したスキルが大人になつた時の問題行動に大きく影響することになる。

### 情報処理(認知)の特性

私たちは、視覚、聴覚、嗅覚、触覚などを使い情報を得るが、ASDの脳においては視覚情報が優位であり、話し言葉が苦手である。言葉の説明ではイメージできず、分からないものは「嫌」となる。モデルを見せ、視覚からイメージさせることが有効である。

しかし、注意すべきことは、視覚においての認知の仕方が非常に細かい点だ。物事をパーツパーツで見ていることが多い。例えば、学習や行動モデルとして友だちを見せるとき、見ているから大丈夫かと思えば、友だちの靴を見ていたとか椅子の隅の数字が気になったというふうな事が起こる。



### ①パニック

こる。これを防ぐには、何度も繰り返して見せることだ。また、2つ以上の情報処理が困難であり、同じパターンであれば分かり易いが、少し違いがあると混乱してしまう。さらに、写真の記憶やレコーダーの記憶と言われるもので、見たものを細かくコピーすることができたり言葉を使うことができるが、意味を理解していないことがあるという特徴がある。

### ②回避行動

本人はパニックになることを嫌だ。思っていない言葉や行動をとったり、記憶がスポンと抜けることもある。このパニックを回避しようとし、気持ちを落ち着かせようとする行動がある。一番多いのが口の中に物を入れることだ。鉛筆をくわえたり、いろんなところを吸ったりする。繰り返しの決まった動きをする。落ち着くので、教室の中を走り回るような行動もある。パニックがおさまるまで何もせずに見守り、おさまってから指導をするというのが鉄則だ。これらの行動をパニックだと思わず、違った指導をして大変な結果を引き起こしてしまうことがある。この場にはパニックになると思つた子は教室から飛び出すのだ。また、安全な場所に潜り込もうと、教卓の下や階段下の空間などに入る。特徴は後ろが安全で、前だけ見なければいけいような場所ということだ。これはパニックの場合もあれば、パニックを回避しようとしてやっていることもある。友だちに手を出すのは、その友だちに脅威を感じているため、パニックのことが多い。

### ③自然に獲得できないこと

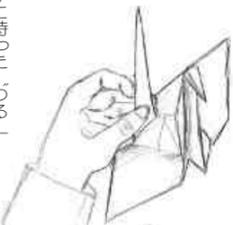
ASDの子にとつて、ノートを写すことは難しい。言葉としてではなく、一字ずつ写したりするため時間がかかる。量が多くなる。黒板を見てもどこを写すのか分からないなど、学年が上がっていくとより難しくなる。ノートは前の続きから書くことが当たり前だが、これが分からず、開いた所に書いた



やることがやらすに、やってはいけないことをやっている。もしくは、やってはいけないことを、注意をされてもやめないといったことが問題行動とされる。問題行動をなくそうと対処しても、よりひどくなったり、予想外の結果に終わってしまう。一度の注意で改善されるものは問題行動ではない。よりひどくなる。繰り返しの決まった動きをする。落ち着くので、教室の中を走り回るような行動もある。パニックがおさまるまで何もせずに見守り、おさまってから指導をするというのが鉄則だ。これらの行動をパニックだと思わず、違った指導をして大変な結果を引き起こしてしまうことがある。この場にはパニックになると思つた子は教室から飛び出すのだ。また、安全な場所に潜り込もうと、教卓の下や階段下の空間などに入る。特徴は後ろが安全で、前だけ見なければいけいような場所ということだ。これはパニックの場合もあれば、パニックを回避しようとしてやっていることもある。友だちに手を出すのは、その友だちに脅威を感じているため、パニックのことが多い。

### 参加者からの感想

発達障害の特性の概観を学べ、大変勉強になった。パニック時の暴言や自虐の言葉の裏にある(一人にしてほしい、あつちに行つてほしい)といった考えを知ることができよかった。(教職員)



○子どもたちの成長のために、いろいろな悩みながら日々頑張っている先生方の大変さがよくわかった。学校に任せるだけでなく、家庭の力・地域の力も必要だと思つた。(保護者)

○発達障害のある子どもが何に困り、なぜそんな行動に出るのか、どう対処していけばよいかを改めて考えることができた。自分の

### ④間違つた学習行動

例えば、忘れ物をする。最初は意図的ではないが、国語の教科書を忘れたこと、大嫌いな音読をしなくてすんだ。忘れていけば音読をしなくてすむと間違つた学習をする。パニックもそう。本来は怖いパニックだが、パニックついたら嫌いな国語の時間が終わつていた。パニックついている間に解決すると間違つた学習をする。パニックをしよつちゅう起こす結果になる。

### 自然にできないこと

当たり前前にできるだろうと思つていることが、発達障害がある子にとっては難しい。例えば、顔を見ながら話を聞く。椅子に座つて話を聞く。タイピングよく返事をする。長い話に集中を続ける。誰が誰に話しか

発達障害の特徴として、思いつきの行動やパニック及びパニック回避行動、間違えた学習、自然に獲得できていない行動などに触れてきた。これらを念頭に、その具体的方法や支援などを考えていければと思う。

○子どもを理解するには、やはり豊富な知識が必要だと感じた。「知らないことは差別につながる」といわれるが「知っていない」とは支援できない」と思つた。(教職員)